

AI 会話練習に対する意識調査の試み — 中国人日本語学習者・教師を対象とした —

A Preliminary Study on Perceptions of AI-assisted Conversational Practice -Focusing on Chinese Learners and Teachers of Japanese-

段 瑞琪, 佐藤 弘毅
Ruiqi DUAN, Kouki SATO
名古屋大学大学院人文学研究科
Graduate School of Humanities, Nagoya University
Email:duan.ruiqi.m4@s.mail.nagoya-u.ac.jp

あらまし：本稿では、中国人日本語学習者と日本語教師を対象にインタビュー調査を行い、中国の大学における日本語会話教育の実態と評価、ならびに AI 会話練習に対する意識を明らかにした。調査の結果、学習者・教師の双方が即興的かつ自由度の高い会話活動に強い期待を抱いていることが分かった。また、AI 会話練習に対しても新たな手段として期待が寄せられていたが、不安の解消と動機づけの強化が重要であると認識した。

キーワード：日本語学習 発話学習 生成 AI 中国人 意識調査

1. はじめに

近年の AI (人工知能) の急速な進歩により、言語教育や学びの在り方に大きな変革をもたらすことが考えられる。もし AI 技術を外国語学習環境における学習者の会話練習に活用できれば、空間や時間の制約から解放され、会話能力を向上させることが期待できるだろう。ただし、言語教育の直面する変化に対しては、期待の声だけでなく、不安を感じる声も多く聞かれる。特に AI は登場してからまだ日が浅く、多くの日本語学習者と教師は、限られた情報に基づき、漠然としたイメージを抱いているのが現状である。そのため、各対象が AI に対するどのような態度や意識を抱いているかを明らかにする研究が増えていく一方で、AI 会話練習に対する態度やそれらにどのような要因が影響を及ぼすのかを確認することも必要であると考えられる。

そこで、本稿では中国人日本語学習者と中国人日本語教師を対象とし、大学における会話教育の実態と評価を確認した上で、AI 会話練習に対する意識を明らかにする。本原稿では今後の大規模アンケート調査の基礎資料として、参考になる影響要因を探る。

2. 方法

2.1 調査対象・調査方法

本調査は中国大学の日本語学部 to 所属する大学生 3 名と中国人日本語教師 2 名を対象とし、インタビュー調査を行った。調査対象はそれぞれ五つの大学に所属し、調査協力者 S1・S2・S3 は、中国大学の日本語学部の在籍生で、調査協力者 T1・T2 は中国大学の日本語学部の在職、非母語話者日本語教師である。調査の実施時期は 2025 年 1 月 17 日～22 日であった。

2.2 調査項目・分析方法

本調査は先行研究⁽¹⁾の調査票項目(中国大学の

日本語学部：タイプ 1：会話授業の基本状況，タイプ 2：行われている教室活動)に，タイプ 3：現在の会話教育と AI 会話練習に対する調査協力者の評価を加え，インタビュー調査を行った。

本研究では、学習者および教師の語りから多様な意識パターンを明確に抽出する必要があるため、テーマティック・アナリシス法⁽²⁾を分析手法として採用した。

3. 分析結果

3.1 会話教育の基本状況

表 1 から、①授業の頻度や時間が限られており、会話練習が不足している可能性があること、②クラスの人数が多いため、学習者一人ひとりに十分な発話機会が確保されにくいこと、③母語話者教師の人手不足により、学習者が母語話者と話し合う機会が限定されているという課題が浮き彫りになっている。

3.2 行われている教室活動

先行研究⁽¹⁾を参考し、中国大学で行われる教室活動を 5 種類に分けた。「インプットを中心とした活

表 1 中国大会話授業の基本状況

番号	会話授業の週間時間	クラス人数	学年人数	日本人教師在籍人数	会話授業担当教師
S1	3 時間	15	120	2	日本人
S2	5 時間	26	460	5	中国人 日本人
S3	1.5 時間	20	87	2	日本人
T1	6.75 時間	28-30	240	1	中国人
T2	3 時間	25-35	306	なし	韓国人

動（聞く・見る）」、「繰り返す練習」、「学習した表現を用いた活動」、「読んだり聞いたりした内容を再生する活動」と「自由度の高い活動」である。

⑤「自由度の高い活動」に関しては、3人の調査協力者が「自由会話はほとんどない」と回答した。加えて、「インタビュー活動がない」「テーマや図を用いて日本語で意見や感想を述べたり描写したりする活動があまりない」などの報告も見られ、これらは先行研究⁽¹⁾の調査結果と大きな差異はない。また、先行研究⁽³⁾も、中国の大学における日本語教育の現場では、「創造性の高いコミュニケーション練習はあまり行われていない」と指摘している。先行研究⁽³⁾の2005年から本調査に至るまでの約20年間、即興的かつ自由な会話練習の不足という状況は、大きく改善されていないことが示唆される。

さらに、「即興スピーチや即興の質問応答に対して、強いストレスを感じた経験がある」といった回答も見られ、学習者の即興的な会話練習に対する心理的負担の大きさがうかがえる。こうした状況を踏まえると、中国の大学における日本語教育では、即興的かつ自由度の高い会話練習の長年にわたる不足という現状を改善し、学習者の即興的会話練習に対する不安を緩和するための具体的な解決策の検討と導入が求められている。

3.3 現在の会話教育・AI会話練習に対する評価

現在の会話教育に対する評価は、学習者・教師のいずれからでも概して低く、「会話能力の向上に役立っていない」「授業内の会話相手が限られている」といった理由が多く挙げられた。今後の会話教育に対する学習者の期待として、最も多く挙げられたのは「授業内で即興的かつ自由度の高い会話練習を行いたい」というものであった。これに加えて、「授業を通じて自分の会話の反省を促したい」「先生との会話のやり取りを増やしたい」「正確性の指摘を受けたい」「身近な話題で会話したい」といった要望も見られた。こうした期待がある一方で、現状では十分に実現されていない。この期待と現実とのギャップこそが、学習者および教師の双方から現在の会話教育に対して低い評価が下されている主な要因であると考えられる。

図1が提示した通りに、このギャップを埋めるために、AI会話練習を提案する。AIによる会話練習に関しては、調査協力者の4人がポジティブな印象を持っていた。また、T1は、AIが学習者のレベルに応じて適切に対応できるかどうか懸念を示し、AI会話教育に対して否定的な評価を与えた。

AIを活用した会話練習の主なメリットとして、第一に「会話練習の機会を提供する」が挙げられる。情意面では、「不安が軽減できる」「人間関係を気にせずに練習できる」「他人の目を気にしなくてもよい」という点が大きな利点である。また、AIは「随

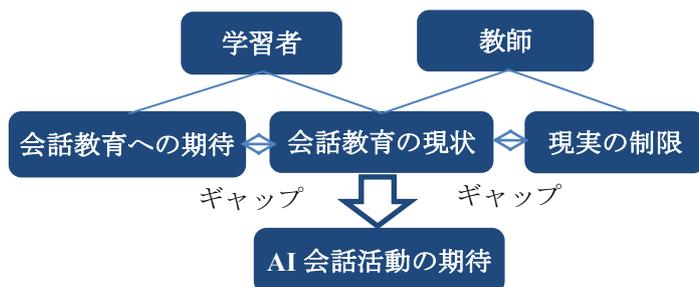


図2 会話教育：期待と現実とのギャップ

時訂正」を行うとともに「人間味の配慮」が可能であり、標準的かつ聞き取りやすい発音を提供するため、学習者の発音改善や母語話者教師不足の補完に寄与すると考えられる。

一方で、AI会話練習に対する懸念も明らかになっている。AI会話練習経験の有無を問わず、「AIの発話が不自然」「AIの不自然な発話に影響される懸念」が共通して指摘された。また、「AIが学習者の発話を正確に捉えられるか不安」「AI発話の文法の正確さ」についての正確さに関する点も不安材料として挙げられている。

調査協力者5名全員がAI会話練習の存在を認知していたものの、3名は未経験であった。未経験者が利用を控えた理由としては主に「モチベーションが足りない」が挙げられ、さらに一部には「利用方法に困る」という声もあった。以上の結果から、教育現場でAI会話練習を導入・定着させるためには、利用方法の周知よりも、まず学習者に対する動機づけを強化することが重要であると考えられる。

4. まとめ

以上の結果から、学習者も教師も、即興的かつ自由度の高い会話活動に対して高い期待を抱いている。しかし、実際の教育現場では、理想と現実の間には大きなギャップが存在している。こうした背景から、学習者と教師は、AI会話練習に対して、ギャップを埋める新たな手段として期待を寄せるようになっている。しかしながら、AI会話練習に対する、学習者および教師が抱く懸念を解消し、学習者の動機づけを強化することが重要であると考えられる。

参考文献

- (1) 長坂水晶, 木田真理: “中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査: 中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識”, 国際交流基金日本語教育紀要, 第7号, pp. 43-57 (2011)
- (2) 土屋雅子: “テーマティック・アナリシス法 インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎”, ナカニシヤ出版 (2016)
- (3) 冷麗敏: “中国の大学における「総合日本語(精読)」に関する意識調査—学習者と教師の回答を比較して—”, 日本言語文化研究会論集, 創刊号, pp. 59-73, (2005)